三島由紀夫
戯曲全集

昭和37年3月20日　發行
昭和41年8月15日　二刷

著者　三島由紀夫
發行者　佐藤亮一
發行所　株式會社新潮社
東京都新宿區矢來町71
電話東京(260)1111
振替東京808番
印刷・二光印刷
製本・神田加藤製本
(亂丁本はお取換へ致します)

三島由紀夫戯曲全集　定價　3700圓

© by Yukio Mishima, 1962. Printed in Japan.

目

次

多幕物

只ほど高いものはない……一〇
夜の向日葵……五七
若人よ蘇れ……一四〇
白蟻の巣……二一五
鹿鳴館……二七〇
ブリタニキュス……（安堂信也譯）……三三一
薔薇と海賊……四〇五
女は占領されない……四七一
熱帶樹……五三九
黒蜥蜴……五九八
十日の菊……六七一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

一幕物

火宅……七三六
愛の不安……七五二
燈臺……七六五
ニオベ……七九二
聖女……八一二
船の挨拶……八三三
三原色……八四二
大障碍……八五八
朝の躑躅……八七一

近代能樂集

邯鄲……八九六
綾の鼓……九二〇
卒塔婆小町……九三九
葵上……九五三
班女……九六六
道成寺……九七七
熊野……九九一
弱法師……一〇〇四
外國に於ける上演目錄……一〇一〇

歌舞伎・舞踊劇　オペレッタ

あやめ……一〇二六
艶競近松娘……一〇三五
地獄變……一〇四四
溶けた天女……一〇六一
鰯賣戀曳網……一一〇〇
熊野……一一一六
芙蓉露大内實記……一一二六
むすめごのみ帶取池……一一三九

三島由紀夫戯曲全集

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

多幕物

只ほど高いものはない

三幕の家庭劇。事件はすべて近藤虎吉の家の居間兼茶の間にて起る。

第一幕　冬

第一場（良人・妻）

良人（近藤虎吉、五十二歳、運輸省の局長、炬燵に當つてゐる）ああ、もうかんべんしてくれ。役所からへとへとになつてかへつてくると、すぐそれだ。

妻（成子）まあ、大袈裟ね。たつた一言、女中を何とかして頂戴と申上げただけなのに。

良人　たつた一言！

妻　ええ、たつた一言。

良人　それぢやあ、まあ、さういふことにしておかう。しかしそのたつた一言を、何日も、何週間も、いや、何ケ月もぶつつづけにやられると、俺はもう家へかへるのがいやになるんだ。

妻　でもあなたは、あのとき以來、御出張のほかには一度も外泊なさらない。

良人　あのとき以來つて？

妻　おひでさんの事件以來よ。もう廿年も前のはなし。

良人（苦い顔をする）まあ女中の話は俺に任せておけ。いま考へてる宛もあるんだ。

妻　いつも任せておけ、いつも考へてる。それで何とかして下さつたためしがないぢやないの。戰爭中や戰爭がすんでしばらくのあひだは、女中がなくたつて我慢しましたわ。でもこのごろぢや、女中のゐない家なんてありはしない。かりにも運輸省の局長さんの家に……。

良人　なんだつて克子を働らかせないんだ。

妻　ちやんと働らいてをりますよ。でもあの子だつて、近いうちに春雄さんのところへお嫁に行くんだし、あの子がゐなくなつて急に困らないやうに、今からあたくし一人で何でもできるやうにしとかなくちや……。

良人　現に何でも一人でできるんだらう。

妻　いいえ、もうできないの。留守番もなしに毎日かうやつて家にばかりくすぶつてるのがたまらないの。戰爭前、あなたが事務官時代だつて、女中がゐたわ。あのころは樂だつた。出たいときにはいつでも出かけられたし、見たい映畫は見のがさなかつた。

良人　だつてお前、あのころは俺の田舍の家もちやんとしてゐた、月々補助の仕送りがあつた、おまへの里だつてちやんとしてた。……考へてもみろよ。賄賂もとらない役人生活で、おいそれと女中が雇へるものか。その上達男が、京都の大學なんぞに入りやがつて、高い下宿に泊つてゐるから、あの仕送りだけだつて並大抵ぢやない。

妻　そんなこと今さらあなたから、教へていただかなくたつてわかつてゐるわ。でもあたくしは女中がゐなくては生きられない女なんです。母は私をおさんどんに育ててくれたわけぢやございません。見て頂戴、このかはいさうな手。（ト手をひろげてみせ）冬の間の水仕事の辛さなんぞ、いくら言つたつてあなたにはおわかりにならない。

良人　わかつた。わかつた。よおくわかつた。……一休みしよう。茶をくれないか。

（妻が茶をいれてゐる間、立つて窓をあけて、外を見てゐる）

妻　寒いぢやないの。お閉めあそばせ。

良人　（頑なに閉めず）妙にしんとしてるな。雪でも降りさうだ。おい、今日の夕刊の天氣豫報はどうだつたい。（妻、答へず。良人もなほ頑なに窓を閉めずに、外を眺めながら、ややあつて）……女中の宛もなくはないんだ、實は。

妻　え？

良人　（ふりかへりて）ただ、おまへの氣に入るかどうか、そこがちよつと。

妻　お茶が入りましてよ。

良人　現金なもんだ。（かへりて坐す）

妻　氣に入るも氣に入らないもなくつてよ。女中なら何でもいいの。少々のことは、我慢する決心ができてゐるの。どんな人？　めつかち？　それともつんぼ？　惡い病氣なんかもつてるんぢやないでせうね。

良人　そんなことぢやない。ただ年をとりすぎてる點がね。女中といふよりむしろ婆やだな。

妻　いくつなの、その人。

良人　五十五歳。

妻　（自分にたづねるやうに）五十五、……あたくしより丁度十三年上。あなたよりも三つ年上。……あ

たくしより十三、あなたより三つ、……（不安を紛らすやうに）そんなに年寄ぢやないわ。

良人　そんなに年寄ぢやない。

妻　名前は何ていふの。

良人　名前なんか、おまへ、どうでもいいぢやないか。

妻　名前は何ていふの。

良人（横を向いて、呟くやうに）兩角……ひで。

妻　あ！（永き間）おひでさんが、東京に。

良人　役所へたづねてきた。

妻　はじめて？

良人（意味をとりかねて）え？

妻　あの時以來、はじめて？

良人　さうだ、二十年ぶりだ。

妻　どうしてわかつたんでせう、あなたのお役所だの、あなたの……。

良人　新聞で見たんださうだ、産業新聞の座談會で、俺の名前が肩書附で出てゐたのを。

妻　まあ、それでどんな樣子？

良人　俺もしばらくわからなかつた。ひどいおちぶれ方だ。それにひどい年寄だ。見るかげもない。着物の破れをかくすためなんだらう、掃除婆あの着るやうな黑い上つ張りを着てね。

妻　あの人が……。

良人　あの派手な人がね。十五六年前に例の獨逸人とわかれて、それから酒場をひらいて失敗して、滿洲へ行つて、また失敗、放浪、終戰、無一文、引揚、といふ紋切型だ。かへつて來て天理教の教會の小使になつた。どういふ事情だか、そこをやめた。身寄りも何もなくつて困つてゐる。小使にでも使つてくれ、といふんだ。役所はたださへ人員整理で、小使一人を入れるのも容易ぢやない。すると今度は女中にしてくれといふんだ。只働らきでいい、御飯さへいただければいい、罪ほろぼしに身を粉にしてはたらくといふんだ。天理教の、何と云つたかね、例の勤勞奉仕さ、……うん、ひのきしんのつもりではたらくといふんだ。

妻　それで、あなた、うんと仰言つた……。

良人　いや、家内と相談した上で、と言つて一旦歸したよ。（間）

妻　天罰つて、小氣味のいいものだわねえ。……でもね、あたくし同情するのはいやよ。同情したりするのは自分に嘘をつくことだわ。……そのお話、斷つていただくわ。今さらあの女に家の閾をまたがせる筋合はないわ。

良人　どうして？

妻　どうして、ですつて。（怒り心頭に發し）どうして、とは何。あなたはきつと貰ひ泣きでもなすつて、半分請合つていらしたんでせう。ええ、ええ、あなたは神様よ。襟つ首から後光がさしていらつしやるわ。ありがたくつて拜みたくなるわ。あなたはあの女にさんざん玩具にされたあげく土足で踏みつけられた方ですよ。そのあなたが……。

良人　だつて、二十年も昔の話を……。

妻　二十年、まるで昨日のやうだわ。あたくしは忘れません。決して忘れません。あなただつて、忘れたとはいはせません。あの女とのことがあつてから、あなたは御出張以外には一度も外泊なさらない。浮いた噂一つお立てにはならない。はじめのうちこそ、あたくしは、あなたの二度目の浮氣をおそれてゐた。そのうちに待ちこがれるやうになつた。あなたが二度三度と浮氣をなさるときが來れば、最初の思ひ出が消えた證據だと思つて。……ところが今日まで、あなたは浮氣一つなさらない。黑板に書いた白墨は、自然に消えやしない、消さなければ。……まだ黑板の字はそのままなんです。

良人　そりやひどいかんぐりだ。俺は前非を悔いて、愛妻家の良人にかへつただけさ。そんなところにまで、不服の種をみつけるんぢやあ……。

妻　（もう良人の言葉は耳に入らない）いいえ、嘘。……あの女は、結婚二年目のあたくしからあなたを奪つて行つたとき、獨逸人のお妾をしてゐた。卅五で、豐滿で土人のやうにちやらちやらと光り物をぶらさげて、三つ年下のあなたを、香水漬けにした白豚の肉で堪能させたんだわ。

良人　ふん、ちと品がわるいね。

妻　品のわるい女のことを、お上品な言葉で話せるもんですか。いつとき、あたくしは毒を呑まうかとさへ思つた。あの女を殺してやらうかとさへ思つた。夜中に、あなたが泊つていらつしやる獨逸人の家のまはりをうろついた。獨逸人が半年ほど、商用で本國へかへつてゐたあひだだつたわ。……新龍土町のあの高い石塀、塀のなかの栗並木……。

良人　さうだ、栗の木がどつさりあつた。

妻　門から玄關までは、木犀がいつぱい咲いてた。

良人　黄いろい花、さう、金木犀といふやつだ。

妻　あのときから木犀の匂ひをかぐと、たちまち嘔氣がするやうになつたんです。（又再び思ひ出に叱咤さるゝが如く）……そのうちにあなたは、あの家か

らお役所へお通ひになるやうになつた。私が電話をかけると居留守をお使ひになつた。そのうちにもつと圖々しくおなりになつた。電話口へ出て來て、浴衣を屆けろとおつしやつた。あたくしが屆けに行くと、獨逸人の置いて行つた莫迦げた鶴と龜の模樣のガウンを着て出ていらして、一寸はづかしさうに、「やつぱり浴衣のはうがいいからなあ、」と仰言つた。家へ一人でかへる途中、(泣く)、あたくしは自動車に轢かれそこなつた。運轉手に怒鳴られて、(泣きながら)、あたくし、地べたに坐つて運轉手に手を合はせてたのんだ。「どうか、おねがひですから、あたくしを轢いて下さい」つて。

良人　……。

妻　いやですよ。どうあつてもいやですよ。お斷りします。

良人　(しばらくして、ぽつりと)斷るか。

妻　ええ、もう、あんな女の名前、口に出すのもよして頂戴。

良人　よし、斷らう。(――間。)

妻　あなた、ちよつとお酒でも上らない?

良人　へえ?

妻　氣晴らしよ。

良人　だつて、俺あ。

妻　いいのよ、あなたは下戸だからお猪口一杯。あたくしがのこりをみんな呑んちまふ。

良人　呑んだあげくにあばれたりしないでおくれ。そろそろ克子のかへる時分だらう。かへつてきて、變に思ふから。

(妻、厨へ立ちて、銚子、肴、猪口二つを盆にのせて持來り、火鉢で燗をしつゝ)

妻　やつぱり雪よ。

良人　克子のやつ、傘をもつてつたかな。

妻　あの子は傘なんか要らない子よ。さういふところはあたくしに似てるんだから。

良人　去年は東京のまんなかで、ラッセル車のとほるやうな大雪が降つたつけね。

妻　去年の雪、いまいづこ、だわ。

良人　(遠慮しいしい)今度は、ばかにはしやいでるね。

妻　さう見えまして?

良人　(間抜けた調子で)うん、さう見える。

妻　外は雪で、家の中はあたたかい。それだけで、何だか安心なの。嬉しいのよ。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.c